



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本カトリック教会旭川五条教会の聖堂とその変遷 : 北海道のキリスト教会と教会建築(その四)
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 25, 25-34
Issue Date	1990-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46486
Type	journal article
File Information	25_25-34.pdf



日本カトリック教会

旭川五条教会の聖堂とその変遷

北海道のキリスト教会と教会建築（その四）

川 島 洋 一

△はじめに▽

本稿は「その一・三（註1）」に引き続いて、キリスト教会の伝道によって築かれた教会建築の形態的な視点に立って、建設する側の教会組織との関連性を考えながら建築そのものの形態（平面・正面）的変遷について考察し、北海道における教会建築の歴史を明らかにすることを目的とする。

今回はこれまでのプロテスタント（以下新教と略）教会についての研究成果をふまえて、礼拝行為（註2）をより重視するカトリック（以下旧教と略）教会が建設してきた聖堂を中心に、旭川五条教会を対象として形態的な変遷を明確にし、若干の考察を加える。

一、旭川五条教会の伝道

キリスト教の北海道上陸はそれまでのクリンタン後代を含めると約三百七十年になる。封建制から近代社会への移行時代に再度上陸して本格的に伝道（布教）活動が開始され、百余年を経過した今日では、全道的に教会が分布している。

旧教における布教開始は江戸時代末期の一八六〇年にメルメ神父による箱館（函館）での小聖堂（註3）建設が具体的な出発で、明治時代に入りこの活動は現函館元町カトリック教会へと受けつがれ、道内で最も早くに設立した教会の一つである。その後の布教は沿岸地域から内陸部へと広がり、小樽、札幌そして一九〇四年（明治三十七年）に道北地方の旭川に、現五条教会がアルフレッド・ヨセフ・ウッド神父（主任司祭）によって創設された。

当時の旭川は、陸軍第七師団設置により人口が増え街づくりに活気がみられ、都市としての形態が整いつつあった。こうした状況からすでに新教の四教会（組合、日基、聖公会、メソジスト）が創設されていて、現五条教会は五番目の教会となり、その後十一人の主任司祭が布

教を担当して現在では十二代目となっている。

二、教会建築（聖堂）の変遷

△教会創立時と聖堂建設▽ 明治三十六年の創立時、当時道北地方の布教を担当していたバリー外国宣教会（註4）のラフォン神父の要請により現五条教会の聖堂建設のための敷地選定がなされ、翌同三十七年には市街地に四百八十六坪の現在地を入手した。同時に最初の聖堂及び付属施設が建てられ、それまでの借家での布教から定住地での本格的な活動が開始された。

教会に残されていた資料により、初期から現在までの敷地内における聖堂と付属施設の変遷を「図-1」に示すが、初期聖堂（教師館含約二十九坪）・伝道師住宅（約十二坪）及び物置を合わせて床面積四十五、七五坪の木造平家施設を建設し、旭川における旧教の最初の建設行となった。

△司祭館・聖堂二階増築▽ 初期の教会建築は三棟であったが、その後小会堂（明治四十二年）、司祭館（昭和四十六年推定）、戦後すぐに聖堂二階（聖歌隊席・同二十一年）を増築し、それまでの内陣・玄関部の増改築

注）下図は略図とし縮尺適合せず

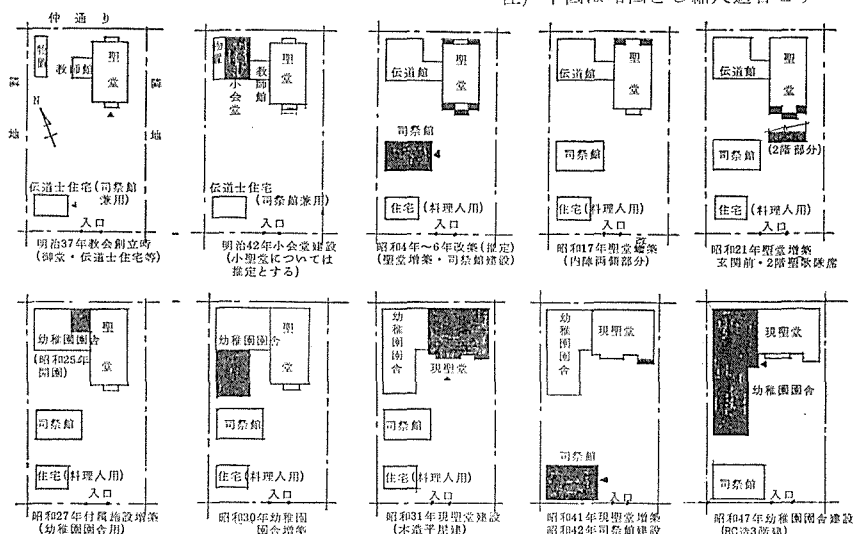


図-1 日本カトリック教会現旭川五条教会の教会建築変遷想像復元配置図（明治37年～平成元年）

表—1 日本カトリック教会現旭川五条教会の聖堂床面積（推定）変遷
（明治37年～平成元年）

年 代	新増改	構造規模 部 所	変化 部分		延 床 面 積				備 考
			M ²	坪	1 階	2 階	延 床	坪	
明治36年	—	借 家	—	—	—	—	—	—	ラフォン神父の遺蹟・敷地遺定・借家位置3の8、2の11、3の11?
明治37年	新	木造平家	65.07	19.72	65.07	—	65.07	19.72	ラフォン神父遺蹟・敷地入手（5の11と2、3、4号各182坪計488坪） 最初煉瓦聖堂建設（木造木羽葺平家49.35坪（1号御地と教団地29.11坪・2号 御地4.5坪・3号供進士住宅11.75坪・合計45.35坪）
昭和4年 ～6年	増	玄關 前 内陣西側	3.24 5.40	0.98 1.64	74.15	22.47	74.15	22.47	1—玄關西側増築 2—廊下室のため玄關結界一手指懸 3—内陣西側増築（寄部屋・控室）
昭和17年	改	内陣 壁	—	—	74.15	22.47	74.15	22.47	内陣寄部屋の壁をこわし天井及び窓の改築作業・聖堂改築（内陣仕上主）
昭和21年	増	玄關 前 中 2階	6.48 17.38	1.98 5.44	85.05	25.77	103.01	31.21	旭川聖堂落成記念講演・改築部分は不明—2,000円（改築費） 玄關の増だけ、聖堂使用に2階建てにして—45坪—500坪位（費用） 1—二階座敷 2—ボート座敷 3—玄關西側増築
昭和31年	新	木造平家	259.38	78.80	259.38	—	259.38	78.80	聖堂改築祝別式・工事費 300万円
昭和41年	増	器具 室	12.15	3.68	271.53	82.28	271.53	82.28	寄部屋の拡張と修理
昭和46年	改	身廊内部	—	—	271.53	82.28	271.53	82.28	聖堂内部改築・天井を下げ窓を断熱にし、断熱材を入れた暖房設備
昭和49年	改	聖堂後部	—	—	271.53	82.28	271.53	82.28	灯台地下タンク工事・聖堂暖房換り替え

と合わせて延床面積三十一、二一坪（旧教師館含まず）となつて初期聖堂より一、五倍の広さが確保された。他の伝道館（旧物置、小会堂、教師館を合わせた）と住宅（料理人用）一棟の計四棟が敷地内の施設であつた。

△幼稚園園舎・新聖堂・新司祭館建設▽

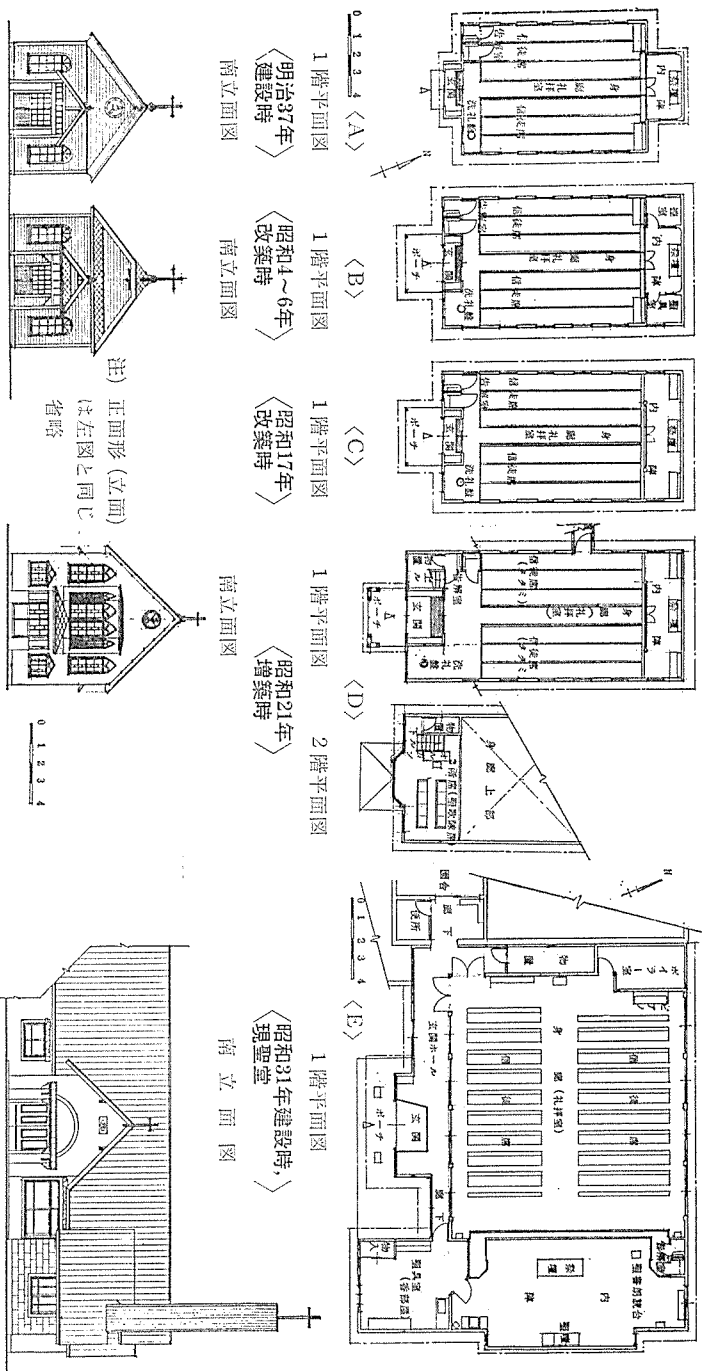
戦後の急激な人口増とキリスト教ブームにより、布教活動は

活発化し新旧教にかかわらず、それまでの老朽化した施設の充実化が問題となり、昭和三十年代以降の教会建築再建が行なれた。同時に社会的活動としての幼児教育に関与し「幼稚園」を付属する教会が現れ、現五条教会も同二十七年には伝道師館を園舎として出発し、同三十年には保育室増築が行なわれた。

その後同三十一年にはそれまでの聖堂を解体して、七十八、六坪の木造平家の聖堂を建設して活動の充実化をはかり、同四十年代には聖堂内陣改築（同四十一年）そして司祭館新築（鉄筋コンクリート造三階建・同四十二年）更に園舎新築（同右二階建・同四十七年）へと移行して今日にみられる三棟の教会施設によって伝道活動が展開されている（表—1参照）。

三、五棟の聖堂

△初期聖堂▽ 残されていた古い資料・写真及び聞き取り調査により、各棟の想像復元図を作成し「図—2」にまとめたが、初期聖堂（図2のA）についての記録（註5）によると「敷地：石狩国上川郡旭川町五条通左十一丁目二・三・四号地各百六十二坪、合計四百八十六坪、木造木羽葺平家四十五坪三合五勺、内訳：一号（註

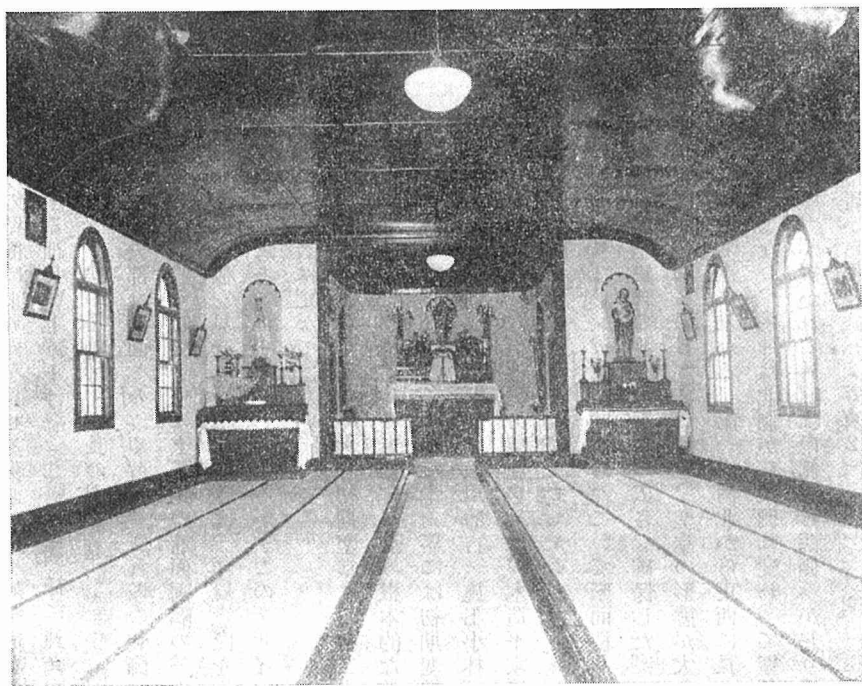


図—2 日本カトリック教会現旭川五条教会の聖堂平面・立面 (正面) 変遷想像復元・実測図面 (明治37年~平成元年)

6) 二十九坪一台(御堂と教師館)―以下略―とあり、又当時の写真等から敷地内での聖堂位置は現在位置に近い北東隅に建てられていた事が明確になった。建設年は前記の明治三十七年で設計は当時の神父が中心になって行なわれたと考えられ、また施工は荒木関儀三郎大工が関与したといわれる。

建物的には平家で切妻屋根妻側の南面を正面として南北に長い棟の建物であり、妻壁中央の玄関の両側には上部半円の欄間付上げ下げ窓が取り付けられていた。また幅の広い破風板の交差部分下には円形の装飾板、上部には十字架が置かれていた。内部礼拝室(写真1)は外陣(信徒席)と内陣(祭壇)によって構成されていて低い簡易的な木製柵で明確に区切られていて、前者は板張床の中央通路を挟んで畳敷であった。

△正面改築時聖堂V 昭和四年までは聖堂正面形は初期の形であったが、昭和六年の写真によると図2の(B)に示す正面形に変わっていたため、この期間にかけて玄関部分が改修され



写真—1 初期聖堂内部(昭和6年頃)

たと考えられる。この改修は玄関廻りが手狭になった事と玄関庇を深くして落雪防止を目的としたと想像する。

正面形の変化は屋根面にあらわれ、棟正面を前面に折った半切妻屋根となりまた妻壁に軒高を合わせた半間の下屋を水平に設けた形となり、玄関庇は前面に一間突き出て若干、形の変化があった。内部では内陣両側にドアが取り付けられている写真が見つかったために小部屋が増築されたと考え、また前記の玄関部分改築により床面積も多少広くなった。

△内陣一部改築時聖堂▽ 外観には変化が無かったが昭和十七年に内陣の両壁面を取り除き、祭壇が二倍の床面積となった(図2のC)。

△一階改築・二階増築時聖堂▽ このように初期聖堂は数回の改築により、平面・正面形態が種々に変化してきたが終戦後すぐに大規模な増築工事が行なわれ、玄関廻り上部に約五坪の二階信徒席(聖歌隊席)を同二十一年に増築した。戦後の復員兵による人口増あるいはキリスト教ブームの始まり時期であり、多くの人々が教会に集まり、聖堂は狭くなった事が理由であろう。従ってこの改築では、それまでの和風から洋風建築(図2のD)へと生れ変わった。切妻屋根妻面を正面とし、モルタル

仕上げの壁面に上昇性を見せる尖頭アーチ的装飾を上部に付設する細長い上げ下げ窓(二階)、同様に鈍角三角形ベジメント状の装飾付き横長の引き違い窓(一階)、また二階中央部の前面へのふくらみ、これらの装飾的な窓ガラス形態、そして中央の玄関庇の前面両隅の三本一組柱と寄棟妻側を見せる屋根の形等は、洋風意匠を意識しての設計であつた事を示しているが、このデザインを用いた設計者は定かではない。

△現聖堂▽ 物資不足の時代に初期聖堂は昭和二十一年に生れ変わったが構造体の老朽化が進み根本的な改築の必要性が問題となった。昭和三十一年には初期聖堂の解体と現聖堂の新築工事が設計松川清吉・施工小林恒志が担当し、工事費三百万円で実施された。木造平家棟の高い切妻屋根金属板葺で、外壁はモルタル・ブロックそして玄関廻りはレンガ仕上げとなっていて床面積八十坪余りで二階増築時の約二・五倍の広さを確保した。

実測図面(図2のE)によると、聖堂の形態が大きく変化している事がわかる。第一に南北から東西に長い長方形平面となり、内陣は北側から東側に変わって聖具室(香部屋)が置かれ、外陣は南側から西側へかわり、信徒席も畳から椅子式へ(写真2)、そして玄関は桁方向



写真—3 現聖堂内部（昭和31年建設）

に移った。更に外観においては十字架をのせた小さな正方形平面（一辺約一・五m）の柱状の塔が置かれ、平側中央の切妻屋根妻壁を見せる玄関には水平な庇と、これを支える上部に持出を装飾的に用いた二つの柱状のレンガ壁が付設されている。その形態は二階増築時に和洋折衷から洋風へ変化した以上に異なり、当時としては近代的な新しい聖堂建設を目指しての設計が成された考えられる。その後同四十一年には聖具室（約四坪）の増築、同四十八、四十九年の内部改装等を行い今日に至っている。

四、五条教会聖堂の形態的変遷への考察

以上により明治三十七年建設の初期聖堂から昭和三十一年の新しい聖堂への建築的変遷について、その形態に視点を置いて各棟配置図（推定）と復元想像図及び実測図を手掛かりとして具体的に述べてきたが、ここでは各時代ごとに変化してきた配置・平面・外観正面（立面）形の変遷について考察する。

△各棟の配置▽ 教会創設と同時に四百八十坪余りの広い敷地の手入と聖堂（教師館舎）及び伝道師住宅を

建設した事は、布教初期であり、まの開拓後二十年程しか経過していないという時代性を考えると、旧教における布教活動上での道北地方重視、またその拠点としての旭川を意識していたという具体的な行為の現われであったと言えよう。また旧教特有の外国人神父による布教活動が中心であったために司祭館また料理人用住宅の出現となった。こうしたの積極的な布教活動は、その後の小会堂増築と伝道館への改築、また聖堂の増改築にも影響したが、戦後の幼稚園開設（昭和二十七年）は社会的要請に答えるとともに、布教拡大にもつながったと考えられる。しかし聖堂よりも広い空間となり、敷地内においては中心的建物になって、教会建築上主従関係の不明確さが助長されて、現聖堂の存在すなわち布教活動の拠点としての形態が不明瞭となっていると思われる。

△聖堂内部と平面形の変遷▽ 旧教の聖堂は伝統的に内陣と外陣が空間的に区分されていて、前者は祭壇を中心とした教職空間、後者は信徒席で構成されてきた。

五条教会においても基本形が保たれてきたが、両者の方向性と玄関位置、そして信徒席の座式から椅子式への変遷が顕著にみられる。また若干の床面積増の変化があったが、戦後での二階席設置は五条教会の歴史の中で最

初で最後の複数階建築の時代であった。

現聖堂での規模拡大に当たって内陣・外陣位置をそれまでの南北からを東西方向に変更した理由は、園児用広場確保のために南方向にはのびせず、また西側に建っていた木造園舎によって西方向への拡大も無理であったために東側敷地境界線方向へと、それまでの桁方向幅での床面積確保が考えられ、あわせて正面は桁（平側）方向として玄関を配置したのである。また、明治時代からの畳の信徒席が板張床に変わったのは、恐らく昭和三十年代からの生活様式の変化による住宅建築の板張洋間普及が影響したと考えられる。

△外観正面形の変遷▽ 正面形（ファサード）は四回の変遷をみるが、初期聖堂すなわち平家切妻屋根妻側の形態は昭和二十一年までつづき、二階増築時と現聖堂建設時に著しく変わった。

明治三十七年の建設時と昭和四十六年の玄関廻りの改築時では若干の変化であり、半切妻屋根と下屋の下り屋根そして玄関庇が付設された事であり、洋風の開口部とあわせて和洋折衷形態であった。しかし、二階増築時にはそれまでの形態はみられず洋風建築に変わり、特に開口部（窓・玄関）の意匠は装飾の細やかさを用いてい

た。現聖堂では、棟高の切妻屋根の平側が正面となり、それまでの屋根断面形を見せていたのとは異なり単調な形態となった。それを補う意味で柱状の塔と切妻屋根断面を示す小屋根と装飾的水平庇を玄関部分に設置したと考えられる。

へおわりに

旭川における最初の旧教布教の本拠地となった明治三十七年創立の現五条教会が建設してきた五棟の教会建築について述べてきたが、その変遷において種々な形態的な変化が明らかになった。しかし、一棟だけで道内における旧教での教会建築の特徴を明確化する事はできないがこれまで行なってきた新教の会堂に関する研究と比較してみると、次の点に特徴がみられる。

すなわち、建設初期から広い敷地確保と複数棟の教会建築の出現は、旭川に限定したとしても新教にはみられない建設行為である。これは外国宣教会の布教に対する積極的な援助が在った事を示していると言えよう。

また、礼拝（ミサ）での信徒席形態では、長い間畳による座式であり、昭和二十年代からの椅子式への変化は

新教での伝道初期（明治時代）からの椅子式とは著しく年代の差異があるが、生活様式の変化とともに礼拝形式の違いから、旧教のセレモニー中心と新教の説教を聞く事を重視する形式との差異によるものであろう。

正面形（ファサード）では、五条教会においては旧教独特（上昇性強調の伝統性）の形態は用いられず、むしろ新教的表情の構成であったといえよう。初期聖堂でも旭川にみられた新教の会堂とそれほどの差異はなく和洋折衷の外観であり、二階増築時の正面形が五条教会においては唯一の旧教を意識した形態といえよう。

ただ、これらの比較は前記した通り一棟の状況からの考察であり、今後、数多くの事例からの研究が必要である。（一九九〇年四月二〇日完稿）

註

- (1) 北海道基督教学会編「基督教学」第一七、二一、二四号参照。
- (2) 足利王大研究収録第三号（一九七七）四十三頁参照。
- (3) 福島恒雄著「北海道キリスト教史」（一九八二）九十八頁参照。
- (4) カトリック五条教会編「献堂七十五周年記念誌」（一九七九）五・四十三頁参照。
- (5) 同右「献堂七十五周年記念誌」（一九七九）五十六―五十八頁参照。
- (6) ここでの「一号」とは敷地番地ではなく敷地内の建物につけ

た番号と考えられ、詳細は同前頁「猷堂七十五周年記念誌」
(一九七九)五十六頁参照。